

「会社」の裏表 若者向け小説に

亡き父を継いで社長になった女子高校生が初めてのビジネスに戸惑いながら家業を立て直す——。こんな若者の仕事への情熱を描いた小説を書いたのは、港区で経営コンサルタントを務める甲斐荘正晃さん(56)。会社の仕組みや慣習が理解できないまま、意欲を失う若い社員に数多く出会ってきた。本を通し、「若者に会社の仕組みを理解してもらい、自分の価値を感じてほしい」と話している。(柄崎太郎)



経営コンサルタント・甲斐荘さん執筆

本の題名は「女子高生ちえの社長日記」。

17歳のちえが父の急死で、突然父親が経営していた音響部品メーカーの社長になってしまふ。最初は難解なビジネス用語や慣習に戸惑う。しかし、同世代の友人の助けを得ながら、大人たちに純粹な疑問をぶつけることで企業の体質を改善していく物語だ。

若者向けのビジネス小説を書いた甲斐荘正晃さん

＝港区赤坂2丁目

「仕事の価値・意味感じて」

これまでビジネス用語を解説する実用書を書いてきた甲斐荘さんにとって小説は初の試み。

「若い人たちに興味を持ってもらえれば」と小説仕立てにした。小説を書くきっかけは、定職に就かなかつたり、入社してもすぐ離職したりする若者が増えていることへの危機感だった。

実際に出向いた企業で若い社員から相談をかけられることが少なくないという。小説でちえが出会う様々な問題は実際に甲斐荘さんがコンサルタントとして見

聞きしたものだ。成果主義を追求しすぎるあまり、かつて新入社員にいろいろなことを教えた先輩社員に余裕がなくなっている、と甲斐荘さんはみる。「結果として、若い社員は意欲をそがれている」という甲斐荘さん。「会社の中のいろいろな職場を知り、自分の仕事の価値や意味を感じ取ること、仕事のやりがいにつなげてほしい」

8日には、若者の就労支援を行っている足立区のあだち若者サポートステーション(千住1丁目)で、甲斐荘さんの就業希望者向けセミナーが行われる予定だ。